座談会
明治文学史

柳田　泉
勝本清一郎 編
猪野謙二

岩波書店

座談会

明治文学史

柳田泉
勝本清一郎 編
猪野謙二

岩波書店

座談会 明治文学史

一九六一年六月九日 第一刷発行 ©
一九七六年五月二〇日 第一六刷発行

定価一五〇〇円

編者 柳田泉 勝本清一郎 猪野謙二

発行者 岩波雄二郎

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六ノ二六二四〇

印刷・精興社 製本・誠光社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき

(一) 本書は、昭和三十二年十一月の「幕末から明治へ」に始まって同三十五年七月の「明治の大衆文学」に至るまで、前後四年、十二回にわたって雑誌「文学」に掲載された「座談会近代日本文学史」を一本にまとめたものである。

(二) この座談会には、柳田泉、勝本清一郎、猪野謙二(司会)のほか、その主題に従って各回にそれぞれ大久保利謙、中村光夫、伊藤整、加藤周一、小田切秀雄、和田芳恵、瀬沼茂樹、平野謙、吉田精一、荒正人、木村毅の諸氏が参加された。

(三) 刊行に当っては、あらためて出席者諸氏の校閲と若干の加筆もしくは訂正を得て、座談会としての自由な発想と形式とを生かしながら、同時に能うかぎりの正確さを期した。

(四) この座談会は必ずしも通史風な均衡と網羅性とを期していない。むしろ、興にまかせて人物論に深入りし、あるいは文献資料の微細な考証に及んでいるが、それらを含めてなお、明治文学史ひいては近代日本文学史全体のあらたな展望をかち得ようとつとめてきた。

(五) 本書には、読者が通読のための便宜にそなえて、各章のはじめに簡略な年表、年譜を掲げ、また巻末に事項、人名の索引を附した。

(六) 挿入された写真版は、徳田一穂氏のご好意による秋声日記と岩波書店所蔵の漱石原稿のほかは、すべて勝本清一郎の所蔵にかかるもの。できるだけ初めてのものを集めた。

(七) 本書の刊行に当り、この座談会を企画、運営された雑誌「文学」編集部の長期にわたるご苦労に対して、深甚な敬意を表したい。

昭和三十六年五月

編　者

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目　次

まえがき

幕末から明治へ……一

文学史と経済史・思想史・政治史とのずれ(一一)――江戸時代における「二つの文学」(一〇)――漢文学の変貌(一四)――勧懲思想と戯作文学(一六)――洋学者の性格(一九)――洋学と文学(二三)――洋学者と新時代(二六)――幕末における地方的文学(二九)――「小説神髄」(三一)

「新体詩抄」から「浮雲」まで……三五

逍遙以前の文学概念(三七)――「新体詩抄」など(四〇)――「西洋」への態度(四七)――逍遙出現への文学的前提(五〇)――逍遙と硯友社との関係(五五)――その後の逍遙(六二)――「我楽多文庫」など(六六)――二葉亭について(七〇)

露　伴……九九

露伴と「国粋主義」(八一)――西鶴と紅葉・露伴(八八)――露伴の「リアリズム」(九二)――露伴の「科学」(九五)――露伴における思想と文学(九八)――露伴の形式と文体(一〇四)――露伴と鷗外(一一〇)――博識ということ、その意味(一一三)

鷗外……一二九
若き鷗外とドイツ(一三二)――医学と文学(一三〇)――ロマン主義と古典主義(一三六)――人間としての鷗外(一四一)――晩年への推移(一四四)
透谷……一五三
精神病理学からみた透谷(一五五)――透谷の長所と弱点(一六八)――透谷における宗教的なもの(一七一)――透谷と愛山その他(一八二)――透谷の到達点、その影響(一九五)
「文学界」から「明星」へ……二〇三
「文学界」の発刊事情と明治女学校(二〇五)――一葉と「文学界」の人々(二一〇)――樋口家と血統の問題(二二〇)――「鶯鶏」と「たけくらべ」(二二七)――明治二十年代の浪漫主義と藤村の位置(二三二)――人物画としての詩から風景画としての散文へ(二三五)――藤村の恋愛(二三九)――藤村をめぐる精神病の問題(二四三)――「明星」の女神、晶子(二四六)
明治の社会文学……二五五
植木枝盛(二五八)――社会文学の源流(二六二)――内田魯庵(二七一)――記録的なものと文学(二七八)――詩歌における革命的浪漫主義(二八一)――広津柳浪(二八三)――社会主義文学の諸条件(二八八)――木下尚江・徳富蘆花(二九二)――石川啄木(二九九)――荷風の文明批評(三〇二)

独歩と藤村……三〇七

独歩と民友社、「青年文学」(三一〇)――独歩の性格(三一三)――独歩と佐々城信子(三一五)――独歩の出生と運命観(三一九)――独歩とキリスト教(三二六)――独歩文学の位置(三三一)――独歩と真山青果(三三四)――藤村における贖罪の観念と禅(三三七)――藤村の結婚(三四一)――肉感的なものを内包した枯淡(三四五)――父の異母妹との問題をめぐって(三四八)――「破戒」の出版をめぐって(三五六)――藤村晩年の心境(三五八)――「家」からの脱出という衝動(三六一)

花袋と秋声……三六五

硯友社と花袋・秋声(三六七)――「文学界」と花袋(三六九)――秋声の社会的視野(三七一)――秋声における実生活と小説(三七三)――外国文学の日本自然主義文学に及ぼした影響(三八〇)――花袋のとらえた性欲(三八二)――花袋・秋声の結婚観(三八五)――花袋の宗教思想(三八七)――日本自然主義の積極的意義(三九二)――蒲団における虚構性(三九六)――藤村・秋声の創作態度のちがい(四〇〇)――「仮装人物」のモデル(四〇三)――どんな作品が残るか(四一四)

漱石……四一九

当時における漱石作品のうけとられかた(四二一)――漱石と子規(四二五)――漱石における社会と個人(四二八)――士大夫の意識と一代目的知識人としての漱石(四三三)――「則天去私」について(四三七)――恥の意識と罪の意識(四四四)――漱石と精神病(四五三)――漱石文学の受け継がれかた(四六三)――近代日本文学のなかの最高峰は誰か(四七〇)

明治の大衆文学……四七五
純文学・文壇文学と大衆文学(四七七)――大衆文学発生の問題をめぐって(四八二)――「健全」なものと「不健全」なもの(四八七)――注目さるべき作家と作品(四九八)――日本の社会と大衆文学(五一二)
――むすび(五三四)
本となるについて(柳田泉)……五三九
露伴の弟子と藤村の弟子(勝本清一郎)……五三四
司会者のあとがき(猪野謙二)……五四三
口絵写真解題(勝本清一郎)……五四八

口絵写真目次

1　樋口一葉「たけくらべ」初出原稿。2　内田魯庵「歳暮の二十八日」浄書原稿。3　国木田独歩「欺かざるの記」原本。4　外山正一「高僧ウルゼーの詩」原稿、中村敬宇朱批。5　徳田秋声「秋声手記」。6　島崎藤村「桜の実の熟する時」原稿。7　森鷗外「衛生新篇」加筆原稿。8　夏目漱石「こゝろ」原稿。

幕末から明治へ

——近代日本文学の前提——

柳田泉
勝本清一郎
大久保利謙
猪野謙二

幕末から明治へ

安永3 (1774)　「解体新書」刊行．(安永1，田沼意次老中となる．)
安永8 (1779)　前野良沢「西洋画賛訳文稿」．平賀源内死す．
天明8 (1788)　大槻玄沢「蘭学階梯」．
寛政2 (1790)　松平定信異学の禁を発す．
享和1 (1801)　志筑忠雄「鎖国論」．宣長歿．この頃狂歌盛んに行わる．
文化2 (1805)　大槻平泉「三国祝章」．合巻この頃より行わる．
文化7 (1810)　大槻玄沢オランダ詩を漢訳す．
文化12(1815)　杉田玄白「蘭学事始」．司馬江漢「西遊日記」．三馬「浮世床」．
文政6 (1823)　中島広足「やよひの歌」(オランダ詩訳)．大田蜀山人歿．
天保2 (1831)　寺門静軒「江戸繁昌記」．
天保3 (1832)　為永春水「春色梅暦」．頼山陽「日本政記」成る．
天保6 (1835)　狩谷棭斎歿．
天保8 (1837)　大塩平八郎の乱．
天保10(1839)　渡辺崋山「慎機論」．高野長英「夢物語」．蕃社の獄起る．
天保13(1842)　天保の改革．人情本の出版禁ぜられ，春水手鎖に処せらる．馬琴「里見八犬伝」完結．
嘉永6 (1853)　ペリー浦賀に来る．杉田玄端「太西童子教」．
安政4 (1857)　蕃書調所授業を開始す．小関三英「那波列翁伝」刊．
安政5 (1858)　渋江抽斎歿．
安政6 (1859)　円朝「真景累ケ淵」成る．成島柳北「柳橋新誌」初篇．ヘボン，フルベッキ来朝．
文久1 (1861)　栗本鋤雲「鉛筆紀聞」成る．萩原広道「源氏物語評釈」．
文久2 (1862)　このころ勝海舟「おもひやつれし君」，西周の新体詩作らる．官板「バタビヤ新聞」刊．
元治1 (1864)　佐久間象山歿．新島襄渡米．英米仏蘭下関を砲撃す．
慶応2 (1866)　福沢諭吉「西洋事情」刊．
慶応3 (1867)　王政復古．柳川春三「西洋雑誌」刊．
明治1 (1868)　五ケ条誓文．「江湖新聞」「もしほ草」「中外新聞」等創刊．橋曙覧歿．
明治2 (1869)　福沢「世界国尽」．昌平学校を改めて大学校，開成，医学二校をその分局とす．(大学南校と東校．)
明治3 (1870)　加藤弘之「真政大意」．このころ中村敬宇「嶽南集」中の訳詩を作る．
明治4 (1871)　魯文「安愚楽鍋」．敬宇「西国立志篇」「自由之理」．ゴーブル「馬太伝福音書」成る．
明治5 (1872)　福沢「学問のすすめ」．教部省三条教則宣布．戯作者「書上げ」を呈出す．
明治6 (1873)　敬宇の同人社創立．このころ万亭応賀の諷刺的小冊子続出．開成学校設立．
明治7 (1874)　「柳橋新誌」第二篇．服部撫松「東京新繁昌記」．明六社成立，「明六雑誌」創刊．「朝野新聞」「読売新聞」創刊．
明治8 (1875)　西周「百一新論」刊．福沢「文明論之概略」刊．新聞紙条例，出版条例，讒謗律公布．新島襄同志社を起す．
明治9 (1876)　坪内逍遙(18歳)東京開成学校に入学す．
明治10(1877)　田口卯吉「日本開化小史」．神田孝平訳「楊牙児奇獄」．「穎才新誌」「花月新誌」「団々珍聞」創刊．東京開成学校と東京医学校を併せて東京大学と改称．

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

文学史と経済史・思想史・政治史とのずれ

猪野　このごろ、現代の日本文学が、大きな転換期にきているというふうにいわれておりまして、その転換期の混乱に立ち向う批評家の中には、日本の近代文学のそもそもの出発点、つまり、文学の自律性とか、近代的な写実の概念とかが成立した時期にまでさかのぼって、明治二十年前後に、逍遙や、二葉亭四迷や、鷗外などの提起した文学理論から、もう一度考えなおしてみようと云う人もあるわけです。また、ある人は、リアリズムを中心とする近代的な文学概念そのものへの反省として、兼好とか、世阿弥とか、中世文学を中心とする伝統的な日本文学の観念をもち出したりしている。そこまでいかなくても、これまでの、自然主義的な小説に対する不満から、小説における物語性の復活というようなこともいわれているわけです。いずれにしましても、日本の近代文学をその根源のところでつかみなおさなければならないという機運が、ようやく広い問題意識になっているということは疑えないと思うのですが、しかしここで、その近代文学の直接の前提となっている、幕末から明治十年代あたりまでの文学の状況、その諸条件というようなことについては、意外なほど再評価が行われていない。いってみれば、逍遙などが、あの特徴的な文明開化の機運のなかで、否定し、あるいは無視してしまった、その否定のしかたなり、方向なりが、原則的・基本的には、そのまま、ずっとひきつがれているといってもいいのではないかと思うのです。これは、ひとつには、この辺のことになると資料その他の点でなかなか近よりにくい、手ぶらではやれないということにもよるのだと思いますが、さいわい、きょうの座談会では、そのところを、両先生から十分に伺えるとひじょうに期待しているわけです。

それから思想史とか、経済史とか、政治史とかの部面では、この部分はひじょうに重要なところじゃないかと思いますが、それは国文学者などの仕事に比べてかなりなずれもあるし、また、いろいろな新しい問題点も出てきているのではないかと思います。そういうところ大久保さんにうかがいたいのですが。

大久保　いまお話があったずれの問題は、なかなか、むずかしい問題だと思うのですが、つまり、文学史でも、経

済史でも、思想史でも、だいたい歴史的な研究は、明治以後、西洋からの方法なり、そういう専門の領域が入ってきましたが、それぞれの分野で、独立して発達したために、相互の関連というものがなく、したがって、ずれの問題も出なかった。しかもそれぞれの分野が専門化されて、アカデミックな線で、専門家の仕事として行われてきました。それが大正期になると、いわゆるデモクラシーの線にそって学問が大衆に解放されて民衆化される。歴史の分野では、文化史というような機運が起り、いろいろな文化現象を、政治も、経済をも含めた文学・芸術・思想、そういうものを総合的に捉えようとする傾向となって、文学史あるいは芸術史・経済史・思想史が合流して、そこではじめて相互の関連がうまれてきた。

それから、昭和期になりますと、唯物史観が出てきて、いわゆる上部構造・下部構造の関係から文学・芸術・思想を、下部構造から解釈していくというようなことになってきたわけです。文学史の社会史的研究、そのなかには、津田左右吉氏の、社会史的観点に立った文学史があり、また極端な、唯物史観の立場からの文学史があらわれた。それが、最近また、修正されるというような状況になってきている。

そこで、明治文学の問題ですが、これは結局、近代文学の創出過程が中心になるわけですが、だいたい、西洋文学の影響、逍遙の「小説神髄」、その後二葉亭などにおける西洋文学の影響をおもく見て、そこから、近代文学の創出を見出すという傾向が強かった。

それから歴史のほうでも、明治維新の解釈のしかた、——従来はだいたい嘉永六年、ペルリの来航が、維新史の起点となっていたが——、これは要するに外圧すなわちそとからの影響を強く見た見解です。

ところが、昭和以降の、新しい傾向として、外圧の面と、国内的に、封建社会の解体が進行して、都市の繁栄、商業資本の農村侵入によって、全国的市場が形成され、マニファクチュアの形で、新しい生産様式が、古い経済機構のなかからうまれてくる。そういうような、内部的な、近代的関係の発展が、明治維新への大きな推進力になった。そういうところに、外圧がきて、明治維新という、特殊な型の、近代化がうまれてきた。そういう内部的な、経済関係の近代化の追及から明治維新の起点もさかのぼって、天保期に設定されるようになった。さらに新しい見解も提出されて

います。

文学の場合でも、さっき猪野さんが指摘されたように西洋文学の影響の前段階として、幕末から明治初期の戯作文学、それから漢文学、考証学、というような、封建文学自体の内部から近代文学の創造過程を求めるという見解が出ているというお話だったのですが、やはり経済史でいうような全国市場の形成、すなわち読者層の拡大とか、あるいは出版方法の近代化、とくに、ジャーナリズムとの結びつきとか、文学の大衆化のうえに戯作文学がどういう役割を果したかという問題などがあると思う。戯作は、文学自体としては卑俗であるかも知れないがやはり、近代社会の文学、或は民衆の文学として、幕末から明治初期の、新しい社会関係のなかから出てきたのではないか。そこで明治の近代文学と江戸文学との関連がもっと探求されなければならないし、それにしたがって明治初期の戯作文学の再検討が必要となるでしょう。そういう点で経済史や思想史の研究とのずれが指摘されると思われます。

猪野　その戯作ですけれども、だいたい、戯作文学が明治の近代文学に、発展的に結びついていないという問題、これはたとえば例の「三条の教則」への答申が物語るように、何よりまずその頃の戯作文学が、エネルギーを失っていたからで、そのことは、やはり、その後の日本の小説の出発にとって、不幸なことだったという感じを持つわけなんです。

しかしそれにしても、その戯作をそういうものとして、十ぱ一からげにして否定してしまえないものがあるとも考えるのです。万亭応賀なんかのもっていた一種の反骨みたいなもの、これは旧幕臣出身の洋学者なんかのそれとも、共通なものがあるのかどうか、私としてはそういう点も、少し伺いたいのです。

柳田　これは共通とはいえませんね。応賀はその洋学者へくってかかっているわけですから。

勝本　序論に関してですがね。文学の研究者は、わりあいに、江戸文学と明治文学の関連というものを、研究しなかったと思うんです。その点がきょう最初からの問題のずれの問題だと思うのです。経済史だの、思想史だの、政治史だのの人たちにとっては、江戸時代をどうみるか、幕末をどうみるかということは、重大な問題なんですね。その態度が定まらなければ、明治というものをどう扱ってよいか、どう解釈してよいか、態度がきまってこないわけです

ね。

その点で、日本の近代文学を、ほんとうに取り扱おうと思うと、江戸時代の文学をどうつかむかということが、重大な問題だと思うのです。ところが、それをしようとしても、いままでのところでは、江戸文学というものは、一体中世文学なのか、近世文学なのか、近代文学なのかといったように、時代区分に還元したような問題になってくるのですね。

だいたい日本の文学史では、古くから、上古、中古、中世、近世、最近世と言った五つの時代にわけて取り扱ってきた考え方が主流だったわけです。そこにもってきて、西洋流に、古代、中世、近代というように、三つにわけて処理しようという考えが生じた。そうなると、中世と明治以後との間に、江戸時代がはさまれて、江戸時代は、封建時代だから、中世文学として取り扱うと考えるか、あるいは、もっと、市民文学だから、これは近代文学として取り扱うか、そこのところに、しじゅうワクのきめかたの問題が起るわけですね。しかし実はワク自身に問題があるのではなくて、われわれが江戸時代の文学をどうつかむか、そのつかみ方を出発点として、明治時代の文学というものを、どう見るかということを決定していかなければならないわけなんです。

経済分野の現象だと、いわば一つの現象が研究の対象になる。ところが江戸文学ということになると、一方には、町人の文学がある、他方にはまたさむらいの文学がある。ことにその方面でいわゆる純文学的でないものがある。こういう二つのものに対象が分裂している。そこにもってきて、洋学系の文学であるとか、キリシタン系またはキリスト新教系の文学、そういうものがさらに他方に分裂しているから、一人の人がなかなか全分野にわたって扱って行けない。特に、従来の国文学畑の研究者は、われわれの近代文学の研究者にとって重要な側面だと思うものを、だいたい取り扱わないわけですね。私どもが、明治以後の文学につきわれわれの態度を定める上で、いちばん関連があってはっきり見定めて置かなければならないものとして、室町時代以来のキリシタン文学、江戸時代に入ってからの蘭学系の文学——私は簡単に蘭学文学ともいっておりますが——、この中には新体詩の成立史や翻訳文学の成立史がはいります。それから、新聞・雑誌など近代的文学発表機関の成立、キリスト新教の渡来、口語文学の成立など、そう

いうものが、重大な問題だと思うのです。

ところが、それらがいわゆる江戸文学史からは大体はずされている。そこで私どもは、江戸文学の専門家ではないのだけれども、明治以後の文学について自分たちの態度をはっきり定めるために、そういう従来の、国文学者の取り扱わない面だけは遡って、やっていかなければならない、こう考えてきたわけなんですよ。実際のところ、明治維新前に、日本のマニファクチュアが成立していたか、いなかったかということは、経済史家にとって重大な問題ですね。それに当るものが文学史にもあるわけなんです。近代思想の根底になるような考えかた、資本主義の精神の裏付けになるような考えかたが、すでに江戸時代や幕末に発生していたか、発生していなかったか、そしてそれが文学に関連があるか、ないかということは、ひじょうに重大だ。それを誰も研究しない。しないから結局、ただ、明治になってからの文学現象を、非常に底浅く、羅列的に、現象だけを順に追って扱っていく。また他方の立場の人たちは、ただ机上の公式論でもって、いろいろな文学現象を幾つかのワクに入れて見せるだけのことを、ばっさりやっていく。このどっちの態度に対しても、僕たちは、実は不満をもっているのです。単に現象だけを追って行くのではなくて、現象の底に何があったのか、その現象が起ったのは、底の方にあるなにものによってなされたのかどうか、それを扱おうとすると、江戸時代の根源から見て行かないと、出てこない。問題はそこのところにあるのではないかと、こう思うのです。

猪野　以前、勝本さんは、近代を、もっと慶長年間まで遡って考えなければいかぬのじゃないかという説を、文学史の時代区分の問題として、おっしゃってましたね。

勝本　僕のは、単にワクの問題とか時代の名称の問題とかではないのです。近代といわなくても前史と言ってもいい。しかしそういう名称で呼ばれる文学現象の実体を室町時代までさかのぼって研究対象にしなければいけないんですよ。とにかく、そこを研究しなければいかぬという説なんです。

猪野　はっきり時代区分としていいますと、いろいろ問題があるけれども、今おっしゃったようなことは、私もひじょうに大事じゃないかと思う。いわゆる日本近代小説の論というようなことでは、逍遙からということはこれはしようがないが、それがそういうものになるまでの思想史的

な土台ということになると、ずっと溯ってみないとよくわからない。

勝本　むかし、「明治文化全集」が出ましたね。あの全集の新聞雑誌の年表なんか見ると、みな明治元年から始まっている。ところが、もう十年でも二十年でもさかのぼったところから始めて置いてくれたら、近代的な文化現象の発生がみんなはいるわけですから、どれだけ便利だったかわからない。そういう風に近代的な文化現象、文学現象の系譜における新しい要素をさかのぼって行くことも大切なんですが、もう一つ、古い要素の側面、日本の、あるいは東洋の伝統的な文化要素の側面でも近代を用意したものがある、それを見てゆく必要もあります。資本主義の精神が形成される為には現世肯定の、特に現世における生産活動肯定の倫理が準備されていないと都合がよくない。ヨーロッパではカルヴィニズムのなかにその思想があったわけですが、日本にもそれがあったか。あったという説では法然、親鸞の浄土思想を取りあげます。浄土思想というと人間に来世のことばかり考えさせる思想のようですが、これが案外現世の生きかたにかかわる思想なんです。あの世の救いを説く往相廻向の裏側には、この世で救おうとする還相廻向の考えかたがあります。世界内浄土ということも言われます。浄土思想でなくても、大乗仏教の思想にはそれが印度で発生した当時からこの世における菩薩行の強調があります。諸菩薩はあの世で涅槃にはいることもできる境地にいるんだが、この世の衆生への慈悲のためにこの世に菩薩としてとどまり、衆生を救う仕事をするという考えかたです。日本では浄土宗や真宗ばかりでなく日蓮宗や禅宗などもきわめて現世的な教理です。そして江戸時代にはいると鈴木正三や白隠禅師などの思想において現世における職業活動の肯定、職業倫理の形成というところまで来ます。これがカルヴィニズムがヨーロッパで果したのと同じ役割を果したということを中村元氏の「東洋人の思惟方法」、大野信三氏の「仏教社会・経済学説の研究」、増谷文雄氏の「仏教とキリスト教の比較研究」、その他の本がしきりに説いています。しかし私はそれはやや安易な説だと思うんで、根本的には同じでない点をしっかり見定める必要がありましょう。プロテスタンティズム、とくにカルヴィニズムでは彼岸の救いと現世の職業倫理との表裏の関係がしっかりしています。これは人格神を立てて、その意志に二面の統一点を見てゆく教理構造だから可能なんです。ところ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook